

中村 義雄の一代記

2026年

第一章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

亀岡は京都から山を越えたところにある盆地の町で、霧が深いことで知られている。秋になると朝もやが町全体を包み、その中から少しずつ家々の屋根が浮かび上がってくる。子どもの頃の私はその霧を「不思議なもの」ではなく「当たり前なもの」として受け取っていた。大人になってから「あの霧は特別だった」と気づいた。いつもそばにあるものほど、失くなるまでその価値がわからない。

父は小さな印刷所を経営していた。活字を組んで印刷する古い仕事で、インクと紙の匂いが常に家に満ちていた。父は言葉を大切に作る人で、夕食の後によく本の話をしてくれた。「活字にはいのちが宿る」と父は言った。子どもの頃はその意味がよくわからなかったが、教員になってから少しずつ理解していった。

四人きょうだいの長男だった私は、「模範を示す」という役割を無言のうちに背負っていた。勉強はよくできた。

読書が好きで、図書室の本を片端から読んだ。本の世界に入ると、亀岡の盆地が消えて別の景色が広がった。荒野を旅したり、海を渡ったり、歴史の中の人物になったりした。それが読書の魔法だと、子どもながらに感じていた。

小学校低学年の頃から弟や妹の宿題を見てやるのが習慣だった。教えることが苦ではなく、むしろ相手がわかった瞬間の顔を見るのが好きだった。その感覚が、後に教師への道を選ぶ種になっていたのかもしれない。



※実際の本には、ご本人やご家族の写真が入ります。

霧の朝、学校へ向かうイメージ

第二章 学生時代

(12～22歳ごろ)

中学の時、担任の先生から「お前は人に教えることが向いている」と言われた。思えば先生の一言というのは子どもに長く残るものだ。その言葉が私の進路を決めた。教師になってからは、自分の言葉が生徒にどんな種を蒔くかわからないと常に意識するようになった。

高校では文学部に入り、本の読み合わせと感想を話し合う活動に夢中になった。自分の解釈と他人の解釈が違うことがおもしろかった。同じ文章から、人それぞれに違う景色が見えることを知った。その発見が、後の国語の授業の土台になった。

教育大学への進学を決めたとき、父は黙ってうなずいた。多くを語らない父だったが、活字の世界に生きた父が教師の道を理解してくれているとわかった。大学では教育学と国文学を学んだ。授業よりも教育実習が楽しかった。小学生の前に立って初めて授業をした日、緊張で声が震えたが、子どもたちの目が真剣になった瞬間に自分の使

命を感じた。

卒業後、京都市内の小学校に採用が決まった。赴任の朝、亀岡の霧の中を父が車で送ってくれた。山を越えて京都の市街地が見えてきたとき、父が「ちゃんとやれ」とだけ言った。その短い言葉が、霧の中に消えずにずっと残っている。

サンプル — 実際の本は、ご本人のお話からAIが文章を生成します

実際の本は全6章構成です

第1章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

第2章 学生時代

(12～22歳ごろ)

第3章 仕事・青年期

(20～40歳ごろ)

第4章 恋愛・結婚

第5章 子育て・家族

第6章 今の思い・家族へのメッセージ

(現在)

このサンプルは第1章・第2章のみ収録しています。